

芸術作品の成立をめぐる——パレイゾン美学における芸術のペルソナ的特性と社会性

片桐 亜古 (京都大学)

本発表の目的は、イタリアの哲学者ルイジ・パレイゾン (1918-1991) が『形成性の理論』(1987)において提示した「能産的フォルマによる所産的フォルマの形成的誘導」をめぐる理論が歴史的・社会的コンテクストとの関連性において芸術作品の存立を考察する際にも有効性を持ちうるものであることを確認することにある。

パレイゾンは1950年代初頭から60年代半ばにかけ美学の分野で一連の論考を発表するが、その中核を成すのが「形成性の理論」である。同理論において芸術作品は「芸術家による形成行為がうまくいった (riuscita) 際にその成果として立ち現れるもの」と定義される。形成活動を導き「うまくいった」ことを芸術家に知らしめるものとして能産的フォルマ (forma-formans、最終的に立ち現れるであろう作品) が、また能産的フォルマに導かれ形成されるものとして所産的フォルマ (forma-formata、形成活動の過程で形成される作品) が措定される。

この「能産的フォルマによる所産的フォルマの形成的誘導」という理論的枠組みに適うものとして作品形成を捉えれば、作品の具現化は芸術家に負うものの内在する原則に基づき作品が自律的に存立するという様相が浮かび上がってくる。これは、歴史的・社会的コンテクストとの関係に鑑みることなしに芸術作品の成立について考察することはできないという一般的な見解に相反するもののように思われる。

U.エーコは『芸術の定義』(1963)において、師パレイゾンが提示したこの様相は作品の存立を形而上学的位相から捉えたに留まるものであり、作品が存立するという事態をより包括的に把握するためには、作品形成に携わる芸術家が個的ペルソナを備えた実存的存在である点に留意しつつ作品形成の実態の様相を踏まえ、それとの関連性において同様相を理解する必要があると指摘する。エーコのこの指摘を緒に、発表者は以下のような手順で論旨を展開する。まず、パレイゾンが提示した「能産的フォルマによる所産的フォルマの形成的誘導」をめぐる理論と芸術家による形成活動の実行様態に関する理論との整合性、および作品に内在する原則が作品の実現には不可欠であることを確認する。また、パレイゾンの美学理論において芸術家が芸術活動の担い手であると共に社会においては個的ペルソナを備えた一個の実存として提起されている点に着目し、彼が提示する「ペルソナ」概念の確認と芸術活動およびその成果として立ち現れる作品における芸術家の個的ペルソナの所在について考察を行う。ここまでの議論を踏まえつつ論稿集『美学の諸問題』(1966)第六章「芸術におけるペル

ソナ的特性と社会性」を参照することにより、作品はその成立においてそれを実現した芸術家の個的ペルソナの具現化であると同時に芸術家を通し社会性を帯びたものとなることが検証できると考える。